『めくるめく渦の果て』

鳥豆　卓矢

流れる夕暮れのビルや看板を車窓から眺めていると、当たり前のように次の駅を知らせるアナウンスが聞こえた。普通電車は定刻通りホームに着き、慣性の法則で体が揺れる。開くドアからつえをつく老人やさえない恋人たちが外へ出る。代わりに直帰のサラリーマンや大声で盛り上がる女子高生のグループらが乗り込み、俺のとなりに香水のきつい主婦が腰を下ろす。新陳代謝のごとく乗客を入れ替えると、電車はふたたび動き出した。意味を見いだすひまもないくらいに見なれた、バイト帰りの光景だった。

いつもと一つだけ違ったのは、ふいに誰かに肩を叩かれたことだ。見上げると、スーツ姿の男が両手でつり輪をつかんだまま、猿のように俺の顔をのぞき込んでいた。

「ひさしぶり」

と言われても最初はピンと来なかったが、にやけた面からこぼれる八重歯で思い出した。大学で同じ専攻の渡辺だ。後ろで束ねていたはずの長い金髪は、いまや黒く短く似合わないほどさわやかな頭に変わっていた。

「おう。どうした、その格好」

「見たらわかるやろ、就活。いま説明会終わったとこ」

となりの主婦が作ってくれたスペースに渡辺は尻をすべり込ませて座った。疲れた様子でネクタイをゆるめる手つきは、すっかり様になっている。

「陽司はいま何してるん？　大学辞めたんちゃうかって、けっこう心配されてんで」

特徴はないのによく響く声は相変わらずだった。キャンパスに通っていたころは、よく彼や他の男連中らと空き教室で長々とだべっていたものだ。

「なんもしてないよ。バイト行って帰って寝るだけ」

「じゃ就活もしてへんのか」

「まず卒業できるかどうかが問題。そっちは忙しそうだな」

「いや、あかんわ。もうちょい中身のある大学生活送っとけばよかった。留学とかボランティアとかしてさ。文学部やとつぶしが効かんわ。面接でも、ゼミではプロレタリア文学を研究してます、はっ何それ？　で会話が途切れるもん」

大学にすら通っていない俺は、苦笑いを返すしかなかった。

すでに八社の選考に落ちた渡辺は、それから延々と受けた企業の愚痴をこぼした。昔より